

日本に分布するコイ科アブラハヤ属魚類のうち、アブラハヤ *Rhynchocypris lagowskii steindachneri* およびタカハヤ *R. oxycephalus jouyi* (以下、アブラハヤ類) は、本州の一部地域において分布域が重複している。重複域に含まれる岐阜県では、この2種を正確に識別した分布情報が断片的にしか存在せず、詳細な分布パターンや生活史は明らかにされていない。その理由としては、20世紀中頃まで同一種として認識されていた上、分類学的な混乱が今日にかけて続いていること、外部形態が酷似し識別が容易でないこと、水産資源としての利用や研究が行われてこなかったことが挙げられる。アブラハヤ類は河川の上～中流域の流れの緩やかな水域や平野部の湧水地を好むとされており(宮地ほか, 1976)、河川改修等の開発や気候変動による影響を受けやすいと考えられる。また、アブラハヤ類は一部の地域では国内外来種として移入されている。移入先では在来の同属他種への負の影響が懸念されるが、種間相互作用は十分明らかにされていない。そこで、本研究では重複分布域に位置する岐阜県内の河川を対象として、2種の詳細な分布現況やその生息環境を明らかにすることを目的として調査を行った。

調査は2015年4月から2019年1月にかけて岐阜県内の河川で実施した。アブラハヤ類の分布状況を詳細に把握するため、長良川支川の伊自良川流域および飛驒川支川の和良川流域を中心に計248地点で調査を行った。各調査地の魚類相や環境を把握するため、タモ網による採捕調査に加え、水温や水路幅、河床材料、流速、水際・水中の植生有無、水際の護岸状況の記録を行った。採捕された魚類は種ごとに計数し、アブラハヤ類については標準体長の計測も実施した。

採捕調査の結果、19科59種26,428個体の魚類が確認され、このうちアブラハヤ類は181地点から6,723個体が得られた。アブラハヤ類の確認地点と未確認地点を比較すると、確認地点では河床材料が砂礫あるいは礫である地点が有意に多かった。これは、アブラハヤ類が産卵の際に川底へ頭部を突入させる行動をとること(中村, 1969)との関連性が深いと考えられる。アブラハヤ類の比率や種数、各環境条件を説明変数として主成分分析を行った結果、アブラハヤの生息には共存魚種数(正)や水路幅(正)が、タカハヤの生息には河床勾配(正)や共存魚種数(負)、沈水植物の存在(負)が影響の大きい因子として考えられた。これは、アブラハヤがタカハヤよりも下流側に生息していたことを示唆しており、採捕調査の結果とも一致している。板井(1980)は、静岡県内のアブラハヤ類が共存する河川ではタカハヤが上流側、アブラハヤが下流側に棲み分けていたと報告しており、本研究においても伊自良川流域では同様の傾向が示されたといえる。一方で、和良川流域では上流部においてもアブラハヤ類の棲み分けが必ずしも明瞭ではなかったことから、今後はアブラハヤ類の生息に影響を与える限定要因のさらなる検討、より広範囲にわたる分布調査の実施が必要である。